

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月20日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2012

課題番号：20520348

研究課題名（和文）フランス語および日本語におけるモダリティの意味論的研究

研究課題名（英文）A semantical Study of Modality in French and Japanese

研究代表者

渡邊 淳也（WATANABE JUN-YA）

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：20349210

研究成果の概要（和文）：この研究においては、フランス語と日本語をはじめとする諸言語における、動詞の時制・叙法、法的（準）助動詞、副詞類などのカテゴリーにわたるモダリティの多様な発現を、一貫した視点にもとづいて考察した。とりわけ、どのようにしてモダリティが、条件法、半過去、叙想的時制・アスペクト、未来諸時制、*fallor*, *devoir*, *sembler* などの法的（準）助動詞、ステレオタイプにまつわる諸表現、留保表現、ジェロンディフと現在分詞、ポリフォニー、伝聞表現などのさまざまな言語事象にあらわれるに至っているのかを示すことができた。

研究成果の概要（英文）：This study investigated various manifestations of the modality in grammatical categories such as verbal moods and tenses, modal (semi-)auxiliaries, adverbials in French, Japanese and other languages. In particular, I showed the way in which the modality results in appearing in various language phenomena, including conditional mood, imperfective tense, tense *de dicto* and aspects *de dicto*, future tenses, modal (semi-) auxiliaries *fallor*, *devoir*, *sembler* etc, gerundive and present participle, expressions about stereotypes, hedges, multi-voicedness, and hearsay.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	200,000	60,000	260,000
2009年度	400,000	120,000	520,000
2010年度	400,000	120,000	520,000
2011年度	400,000	120,000	520,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：フランス語、日本語、モダリティ

1. 研究開始当初の背景

モダリティは、言語にとっても、その基盤をなす発話行為にとっても重要な概念であるが、その射程はたいへん広く、また、これまで充分には関連づけられてこなかった多

様な文法領域がある。たとえば、つぎのような言語事象がモダリティの関連領域といえる。

(1) 動詞（叙法、時制）は、従来から多く研究されてきたテーマであるが、モダリティの

標示をあらわす諸用法に的をしぼった研究が占める割合は小さい。とくに、時制によるモダリティの標示については、きわめて周辺的な扱いしかされてこなかった。主として時制をあらわすとされる形態が、なぜ、いかにモダリティを標示するに至るのか、という道すじを研究することは、当該領域に対してあらたな貢献となりうる。

(2) 法的(準)助動詞 (semi-)auxiliaire modal は、従来からモダリティ研究の中心的対象でありつづけたが、かつては統辞的研究が主流であり、意味論的研究は 1990 年代からようやくさかんになってきたに過ぎない。このため、意味的な方面には未開拓の領域が少なくない。

(3) 副詞類 adverbial は、モダリティの標示が語彙化されたものとみなすことができる。従来のモダリティ研究では、どちらかという文法的な標示手段が研究されてきたため、語彙的な標示手段は、個々の語彙として研究されることはあっても、モダリティ論の枠組みにおいて研究されることは少なかった。本研究はその間隙をおぎなうことを目指す。

(4) ポリフォニー polyphonie の問題は、従来のモダリティ研究ではかならずしも重視されてこなかったが、モダリティが間主体的に構築される事例は多く、この方面からの考察は研究の発展に資するところが大きいと考えられる。

2. 研究の目的

本研究課題では、前項であげたさまざまな領域の研究を、一貫した視点にもとづいて進めることで、モダリティが、どのような理路を介してさまざまな言語事象にあらわれるにいたっているのか、そしてそれらの事象相互はどのような関係にあるのかを見さだめることを目標とした。

また、その際、主たる対象はフランス語、日本語とするが、スペイン語、イタリア語、ポルトガル語、ルーマニア語などのロマンス諸語にも視野をひろげ、さらなる他言語との対照のなかからこそ明らかになる知見も積極的に拾いあげてゆくこととした。

3. 研究の方法

(1) 初年度：

文学作品、報道・論説文、シナリオといった規範的なジャンルのみならず、口語・俗語における新たな表現（会話、テレビ番組、インターネット上の掲示板、チャットなど）や、フランス語に関してはフランス以外で話されている特徴的変異なども積極的に視野におさめて用例を収集してコーパスをつくる。収集した情報は検索に適する形式に編集・整理し、必要に応じて指標（タグ）を付し、データベース化する。

さらに、さまざまな実例や、それに手をくわえた例文の容認可能性や、直観的解釈、パラフレーズなどを自在に知ることができるよう、外国語については母語話者にインフォーマントになっていただき、調査を行なうとともに、各領域の専門家と面会したり、公開の研究会をひらき、専門的知見を得るとともに、議論を行なう。

(2) 第 2～第 4 年度：

初年度におこなった基礎づけをもとに、各論的研究を推進する。

動詞の時制・叙法の問題に関しては、各言語において具体的な形態の具体的な用法をとりあげ、なぜ、どのようにしてモダリティの諸価値が出てくるのかを研究する。

法的(準)助動詞に関しては、フランス語でいうと *devoir*, *pouvoir*, *sembler* などの動詞、および意味的にそれらと類義の諸表現について、同様にモダリティのあらわれに着目した研究をおこなう。

副詞類に関しては、*J.-Cl. Anscombe* の提唱するステレオタイプ理論 *théorie des stéréotypes* とのかかわりで、および留保マーカー *enclosure* の問題とのかかわりで考察をおこなう。

国内外の学会、研究会などで積極的に成果を発表することとする。また、フランス語での論文も執筆する。

この時期には、広範な領域の研究に本格的にとりくむことになるので、おのおのの文法領域の研究へとモダリティの概念を適用することの困難さがある。毎年、各領域の専門家とともに研究会をひらき、各領域に固有の問題点やそれに対する見解をうかがい、また議論することによって困難を乗り越えてゆく。

(3) 最終年度：

第 4 年度までに行なう各論的研究の成果を総合し、理論化を行なう。この成果をもちこんだ論文を執筆するとともに、論文以外にも本研究課題全般についての報告書を作成し刊行する。また、国内外の学会・研究会などで積極的に成果を発表する。

4. 研究成果

(1) 動詞の叙法・時制をめぐって

① フランス語およびロマンス諸語の条件法：

非現実の仮想をあらわすことを主たる機能とするフランス語およびロマンス諸語の条件法、およびそれとの相関でもちいられる半過去について、可能世界意味論における分岐的時間 *temps ramifié* の表象をもちいることで一貫した説明ができることを示した。日本語の「た」の非現实用法についても同様の説明が可能であることを示した。

② フランス語の「間一髪半過去」と西日

本諸方言の未完了の「よった」:

先行研究ではモダールな用法とされることが多かった「間一髪半過去」を、未完了性を出発点とすることで整合的に分析できることを示した。また、「間一髪半過去」と類似しているとみられる西日本諸方言の「未完了の「よった」」についても考察し、異同を明らかにした。

③ 叙想的時制と叙想的アスペクト:

時制の基本的な機能として、事行を時間軸上に位置づけること(叙事的時制)とならんで、事行を眺望する視点を時間軸上に位置づけること(叙想的時制)があることを重視した。そのことによって、フランス語の半過去や単純未来のモダールな用法の大部分が説明できることが明らかになった。また、アスペクトにも、事態そのものの完了・未完了を示すこと(叙事的アスペクト)のほかに、事態をどのように眺めるかを示すこと(叙想的アスペクト)があることを主張し、それにより、フランス語の半過去や現在分詞の特徴的機能を説明することができた。さらに、叙想性が未完了アスペクトときわめて親和性が高いという発見から出発して、叙想性は事態内部に視点をおく認知モードともかかわりが深いことを示した。

④ フランス語およびロマンス諸語における未来諸時制:

フランス語とロマンス諸語における単純未来形の文法化の比較をおこない、スペイン語、イタリア語、ポルトガル語にくらべてフランス語の単純未来形の総合化(本来は分析的形態であったものの、癒着が進んでいること)が相対的に進んでおり、それとともに時制マーカーへの特化が起きていることを示した。さらに、フランス語における単純未来形と迂言的未来形の機能の比較をおこない、単純未来形の機能を、上記①で言及した分岐的時間の表象をもちいて説明でき、それとは対照的に、迂言的未来形は直線的時間によって説明できることが明らかになった。

(2) 法的(準)助動詞をめぐる

① 拘束的モダリティと否定とのかかわり:

フランス語の *falloir*, *devoir*、イタリア語の *dovere*, *bisognare*、ルーマニア語の *a trebui* の拘束的モダリティをあらわす用法が否定文におかれたときの解釈の変化を中心に論じ、概略的には「しなくてよい」という字義が「してはいけない」という意味に派生するといえるが、その派生にあずかる条件として、時制や命題内容の相違が大きな役割を果たしていることが明らかになった。フランス語の *ce n'est pas la peine*、日本語の「しなくてよい」、英語の *do not have to* などについても論じ、元来「しなくてよい」に特化しているはずのこれらの表現にさえ同様の派生がみとめられることも示した。

② *sembler* と「ようだ」:

フランス語の法的(準)助動詞 *sembler* と、日本語の助動詞「ようだ」について、それらが命題内容の有効性の範囲を限定する「留保マーカー」として機能していることを示した。その際、命題内容の局所的な項目に対する機能と、命題全体への機能を並行的にとらえられることが明らかになった。

(3) 副詞類をめぐる

① ステレオタイプ理論にもとづく副詞の分析:

J.-Cl. Anscombe によるステレオタイプ理論に立脚し、フランス語の副詞 *toujours*、日本語の副詞「やはり」の分析をおこなった。これらの副詞はいずれもステレオタイプの命題を(再)評価することを示すマーカーであるが、その(再)評価にいたる過程は *toujours* の場合と「やはり」の場合でことなることが明らかになった。

② *en quelque sorte* の留保マーカーとしての機能:

副詞句 *en quelque sorte* が、上記(2)の②で言及した *sembler*、「ようだ」と同様、ひとつの辞項を対象とするか、命題全体を対象とするかを問わず、ひとしく留保マーカーとして機能しており、法的(準)助動詞、副詞句といったカテゴリーを横断してモダリティの共通性があることが明らかになった。

③ ジェロンディフと現在分詞:

文中で副詞的要素として機能するジェロンディフについて、遊離位置では競合する現在分詞との対比において考察し、その機能の特徴を明らかにした。また、ロマンス語のなかでもフランス語に独特といわれることがあるジェロンディフの構成について、ラテン語、イタリア語、スペイン語における類似カテゴリーとの比較により、かならずしも独特とはいえない側面もあることを示した。しかしジェロンディフについては第4年度以降における研究であったため、未解決の問題も残っている。ひきつづき考察を深めてゆくこととしたい。

(4) ポリフォニー *polyphonie* をめぐる

① 理論的考察:

単一の発話文中にも複数の主体の声を聴くポリフォニー理論について考察をおこない、上記でも言及したステレオタイプ理論とのかかわりが深いことが確認された。とりわけ、共同主観としての言語の諸規則をささえる主体として、衆の声 *vox publica* の想定が重要であることが明らかになった。

② 日本語の「そうだ」の発話論的・語用論的分析:

「伝聞」のマーカーであるとされる日本語の「そうだ」について、たんなる情報の中継という分析では実例を説明できず、原発話者の全体的意図に対する解釈を提示している

こと、そして、対話者の反応を方向づける機能をになっていることが明らかになった。

③ 日本語の自称詞の分析：

日本語の自称詞は、ポリフォニー理論でいうところの「話者としての話者」locuteur-*en-tant-que-tel* と、「世界存在としての話者」locuteur-*en-tant-qu'être-du-monde* とが分裂し、前者が後者を演出する表現であるという分析をおこなった。

(5) 以上の研究成果は、下記 5. で示してゆく論文、学会発表で公にしたほか、著書 4 冊のなかにもさまざまな形で反映し、ひろく社会に還元することができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 11 件)

- ① 渡邊淳也 (2013) : 「単純未来形と迂言的未来形について」『文藝言語研究・言語篇』(筑波大学) 63, pp.69-106. 査読有.
- ② 渡邊淳也 (2012) : 「Toujours と「やはり」、ステレオタイプ再確認型の副詞」『川口順二教授退任記念論集』(慶應義塾大学), pp.173-185. 査読有.
- ③ WATANABE, Jun-ya (2012) : « L'auxiliaire *sooda* est-il un marqueur de l'oui-dire ? », S. Aoki, Fr. Dhorne et D. Lebaud (éds.) : *Conflits et interprétations (Inter Faculty, 3)*, pp.228-240. 査読有.
- ④ 渡邊淳也 (2012) : 「叙想的時制と叙想的アスペクト」『文藝言語研究・言語篇』(筑波大学) 61, pp.191-234. 査読有.
- ⑤ 渡邊淳也 (2011) : 「ジェロンディフと現在分詞について」『文藝言語研究・言語篇』(筑波大学) 60, pp.121-181. 査読有.
- ⑥ 渡邊淳也 (2011) : 「ステレオタイプ理論をめぐって」『フランス語学研究』(日本フランス語学会) 41, pp.54-59. 査読有.
- ⑦ 渡邊淳也 (2010) : 「フランス語と日本語における留保マーカ―について」『文藝言語研究・言語篇』(筑波大学) 58, pp.55-74. 査読有.
- ⑧ 渡邊淳也 (2010) : 「拘束的用法の *devoir, falloir* の否定の多義性について」『文藝言語研究・言語篇』(筑波大学) 57, pp.25-41. 査読有.
- ⑨ 渡邊淳也 (2009) : 「フランス語およびロマンス諸語における単純未来形の総合化・文法化について」『文藝言語研究・言語篇』(筑波大学) 55, pp.123-144. 査読有.
- ⑩ 渡邊淳也 (2009) : 「時制とモダリティの連関への新たな接近法」『フランス語学研究』(日本フランス語学会) 43, pp.77-83. 査読有.

- ⑪ 渡邊淳也 (2008) : 「分岐的時間の表象をもちいた時制・モダリティの連関の説明の試み」『文藝言語研究・言語篇』(筑波大学) 54, pp.15-44. 査読有.

[学会発表] (計 14 件)

- ① 渡邊淳也 : 「主語不一致ジェロンディフについて」2012年4月20日, 日本フランス語学会第 284 回例会 (於跡見学園女子大学).
- ② 渡邊淳也 : 「フランス語の「間一髪の半過去」と西日本諸方言における「未実現の「よった」」の対照研究」2013年3月18日, 講演とシンポジウム『ことばと外界認知—日本語(方言)・英語・フランス語の構文からみえてくるもの—』(於岡山大学).
- ③ 渡邊淳也 : 「叙想的時制と叙想的アスペクト」2012年5月12日, 日本フランス語学会第 278 回例会 (於跡見学園女子大学).
- ④ 渡邊淳也 : 「叙想的時制と叙想的アスペクト (*Fikrlash zamonlari wa fikrlash aspekti*)」2012年3月15日, 国際シンポジウム『第9回文明のクロスロード』(於ウズベキスタン共和国サマルカンド外国語大学).
- ⑤ 渡邊淳也 : 「ジェロンディフと現在分詞について」2011年12月17日, 福岡大学言語学講演会.
- ⑥ 渡邊淳也 : 「フランス語の「丁寧の半過去」と日本語の「よろしかったでしょうか」型語法」2011年5月14日, 国際セミナー『日本語とフランス語: 対照言語学的アプローチ』(於名古屋大学).
- ⑦ WATANABE, Jun-ya : « L'auxiliaire *sooda* est-il vraiment un marqueur de l'oui-dire ? », 2010年11月24日, 第3回フランシュ=コンテ大学・青山学院大学・筑波大学合同言語学セミナー (於青山学院大学).
- ⑧ WATANABE, Jun-ya : « *Toujours et yahari*, adverbess reconfirmatifs de la stéréotypie », 2010年9月22日, *La stéréotypie : Journées scientifiques tuniso-japonaises* (於チュニジア共和国マハディア).
- ⑨ 渡邊淳也 : 「フランス語の語彙意味論とメタファー・メトニミー」2010年5月29日, 日本フランス語学会シンポジウム『フランス語学と意味の他者』(於早稲田大学).
- ⑩ WATANABE, Jun-ya : « Les termes d'auto-désignation en japonais : un cas de la polyphonie ? », 2010年1月27日, 第2回フランシュ=コンテ大学・青山学院大学・筑波大学合同言語学

セミナー (於筑波大学).

- ⑪ WATANABE, Jun-ya :
« L'approximatif en français et en japonais », 2009年10月28日, 第1回
フランシュ=コンテ大学・青山学院大
学・筑波大学合同言語学セミナー (於フ
ランス共和国フランシュ=コンテ大
学).
- ⑫ 渡邊淳也 : 「時制からモダリティへ : 分
岐的時間による反実仮想文の説明」
2009年9月20日, 清華大学・北京大
学・筑波大学合同言語学セミナー (於中
華人民共和国北京大学).
- ⑬ 渡邊淳也 : 「拘束的モダリティの否定の
多義性について」2009年7月18日, 日
本フランス語学会フランス語談話会
(於慶應義塾大学).
- ⑭ 渡邊淳也 : 「分岐的時間の表象を用いた
時制・モダリティの連関の説明の試み」
2008年9月27日, 日本フランス語学会
第250回例会 (於慶應義塾大学).

[図書] (計4件)

- ① 渡邊淳也 (編) (2012) : 『フランス語と日
本語におけるモダリティ』筑波大学人文
社会系, 126 ページ.
- ② 髭郁彦・川島浩一郎・渡邊淳也 (編著)、
安西記世子・小倉博行・酒井智宏 (著)
(2011) : 『フランス語学小事典』駿河台
出版社, 272 ページ.
- ③ 渡邊淳也 (2011) : 『明快フランス語文
法』早美出版社, 80 ページ.
- ④ 髭郁彦・川島浩一郎・渡邊淳也 (2010) :
『フランス語学概論』駿河台出版社,
240 ページ.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

渡邊 淳也 (WATANABE JUN-YA)
筑波大学・人文社会系・准教授
研究者番号 : 20349210